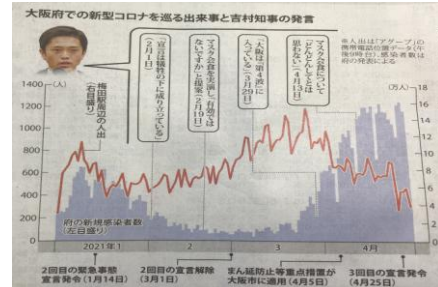


吉村大阪府知事への怒り

写真は毎日 5 月 3 日。吉村知事 経済に固執、「マスク会食」提唱後 人出増、感染拡大でブレ 飲食店にツケと大きな見出し。吉村大阪府知事の「対応」に迫る記事であり、抜粋して紹介。

「飲食店は振り回されっぱなし。店をつぶしたいのか」。休業中のレストラン「本町イタリアン倶楽部」（中央区）のオーナー、小山一樹さんは大阪府をはじめとした行政へ怒りをぶつける。吉村洋文知事はコロナ下でも経済への意識が強い首長で知られる。



そんな知事に飲食店から恨み節が漏れるのはなぜか。話は2月19日にさかのぼる。

この日、府庁では新型コロナ対策本部会議が開かれていた。その席上、吉村知事が突然、着けていたマスクの表面をつかみ、顎まで下ろす仕草を見せて言った。「ひもを持って外し、また着けるのは、やりにくい。有効ではないですか」。食べる時はマスクを取り、会話をする際は再び着ける「マスク会食」を提唱してみせたのだ。

感染症対策と経済活動の両立が持論の吉村知事。だが、経済へ傾斜する姿勢がたびたび目立つ。2回目の緊急事態宣言の真ただ中であつた同1日、「商売をされている方にとって死活問題。多くの犠牲の下に成り立っている制度だ」と宣言解除を見据えた主張を始めた。この日、府内の新規感染者は178人。1月には600人台だった日もあったのに比べれば、感染は収まりつつあつた。経済を提唱するスタンスの背景には、インバウンドに依存していた大阪経済の衰退がある。ただし、吉村知事のメッセージを不安視する専門家も少なくなかつた。近畿大の吉田耕一郎教授（感染症学）は当時、「マスク会食なんかを勧めたら『会食していい』と言っていると誤解される」と憤っていた。

その不安は現実のものとなる。府内の新規感染者も2月28日の54人からじわじわと増え続ける。東京都医学総合研究所の西田淳志・社会健康医学研究センター長は「2月上旬から夜の人出は増えていた。宣言解除のアナウンスが早すぎた」と指摘する。

吉村知事は大阪市内の飲食店での感染対策をチェックするため、4月5日に「見回り隊」も発足させた。ある府職員は「医療崩壊に直面するなか、そこまで人をつぎ込むべき政策なのか。人材の無駄遣いだ」とし、大阪市職員の一人は「現場を知らず、思いつきで先走る。功を急ぎすぎ、『裸の王様』になっている」とこぼす。

コロナ下で、首長のメッセージはどう発信すべきなのか。筑波大の原田隆之教授（臨床心理学）は、解除時の吉村知事の発言について「解除で人の行動が緩むのは当然で、解除後にどう引き締めていくかという点が欠けていた」と指摘する。レストランを休業している小山さんには、行政からの時短協力金も未払いだ。「宣言はいいが、フォローや補償が全くない。飲食店は負担ばかりおしつけられている」

(2021年5月7日)